

エスノメソドロジーによる 社会福祉の研究・教育・実践の新たな「転回」¹

藤 田 徹

Another "Turn" for Social Welfare in terms of Ethnomethodology

FUJITA Toru

この論文は、ソーシャルワーカーに対するエスノメソドロジーの入門を目的としている。特に、エスノメソドロジーのアプローチがソーシャルワーカーの実践に対して、どれだけのメリットを与えるものなのかが検討されている。そもそも、エスノメソドロジーは、社会秩序を構築する合理的な根拠となる普通の人々の実践の方法に関する研究を使命としている。そのエスノメソドロジーから、これまでの社会福祉の研究・教育・実践に対して新たな“転回”を提起する。そして、それを進めるために、事例として“万華鏡”と“芸舞妓”を取り上げている。“万華鏡”が「説明可能性」と「文脈表示性」を記述し、“芸舞妓”が、「相互反映性」の理解を示す。それらがエスノメソドロジーのアプローチであり、現実構築の特徴でもある。また、同様に、ソーシャルワーク実践の現実構築は、エスノメソドロジーの仕組みを前提としている。これらを踏まえて、エスノメソドロジーのアプローチがソーシャルワークにとって有効であることを説明している。

キーワード：相互反映性 手続き論的転回 気づき オントロジカル・ゲリマンダリング 実践知

This paper aims an introduction for social workers to Ethnomethodology. Especially, it discusses that social workers would benefit by Ethnomethodology into their everyday social work. Ethnomethodology has the role to study the practical methods by ordinary people constitute the rational grounds of their social orders. Ethnomethodology provides another "turn" for the view of social welfare. In order to achieve this purpose, there are take up the "kaleidoscope" and the "geimaiko" as an example. A "kaleidoscope" describes accountability and indexicality, and a "geimaiko" describes reflexivity. They are the features of Ethnomethodology. The construction of social work practice is premised the same on characteristics of Ethnomethodology. Based on the above, this paper claims that Ethnomethodology is effect for social works.

Key words : reflexivity procedural turn awareness ontological gerrymandering practice knowledge

I. はじめに

「教科書＝理論・方法等²を逆さまにする」。つまり、これまでの社会福祉教育に「教科書＝理論・方法等の習得が、すなわち、ソーシャルワーカー³としての実践能力の習得でもある」という漠然とした学習観があったとすれば、それを逆転させ「ソーシャルワーク(以下、S

W)実践のために、教科書＝理論・方法等をツールとする」という「転回」から、改めて社会福祉研究・教育・実践を問い直す⁴。これが本論のテーマである。

SW実践は、多様な要素を含んだ複雑な生成過程である。クライアントの課題、それへ対峙するソーシャルワーカーの所属機関・施設における役割、実践場面のアーティファクト等々を構成とするSW実践の複雑系

を前に「教科書＝理論・方法等の習得が、・・・」という学習観があまりにも素朴すぎることは明らかである。

SW実践は、ソーシャルワーカーとクライアント等による相互行為として展開される。それは福祉事務所のインテーク面接でも、福祉施設の生活相談面接でも、社協の住民ニーズの調査面接でも同様である。そして、そのすべての実践には、相互行為としての論理と仕組みが踏まえられている。例えば、ソーシャルワーカーによるクライアントへの「自己決定の尊重」も「プライバシーの配慮」も、その論理と仕組みに基づき遂行されなければ、クライアントは自分の意志を無視されたと憤慨しかねないし、後日、守秘義務の不履行を第三者へ訴えてくるかもしれない。つまり、SW実践は、当事者双方にとって適切な相互行為として成し遂げられねばならない。

そして、この相互行為としてのSW実践を達成するためには、「教科書＝理論・方法等」のツール化が極めて重要なポイントとなる。なぜならば、「教科書＝理論・方法等」をツールとするからこそ、その実践に対する当事者間の多元的解釈を回避し、それによって妥当なSW実践を達成できるからである。また同時に、SW実践に対して「教科書＝理論・方法等」をツールとするからこそ、それらの臨床的な機能を問うことが可能となる。

そして、これらの視点こそが、社会福祉の積年の課題である「理論と実践のかい離」を乗り越える極めて重要なヒントをわれわれに示している。そのことを含め以下の展開へつなげたい。

II. SW実践と「万華鏡」

さて、SW実践と理論・方法等⁵との関係を万華鏡で喩えてみたい。SW実践と理論・方法等の関係が、万華鏡の無限の造形を描く仕組みに似ている、という話である。《いま－ここ》の場面におけるソーシャルワーカーとクライアントのやり取りも、その実践の様相は基本的に無限の可能性の下にある。一見、同じような課題や機会であっても、その実践は常に移り変わり、同じものは一つとしてない。

それは、同じ「制度・サービス」、同じ「方法・技術」であっても、その場面に応じて多様に使い分けられているはずだ。「生活保護制度」の措置も寝たきり高齢者と失業中の健常者では、その運用の仕方は異なるだろうし、「自己決定の尊重」も自力で決定できないクライアントであれば、家族の意志等の補完を持って

実現されるかもしれない。いずれにしろ、SW実践に対する理論・方法等は一つのツールであり、それぞれの状況に応じてツールとして用いられるからこそ、各場面で適切なSW実践が成し遂げられる。

つまり、これらの特徴が、万華鏡がつくり出す造形と似ている。まず、万華鏡の構造と仕組みが、無限の造形を誕生させる前提となる。それは、施設や機関の構造と仕組みが、無限のSW実践を達成する前提であることと同様である。そして、更に、有限個のピース、つまり、無限の造形をつくり出すために万華鏡の筒へ投入されるピースの数や形は有限である。その有限個のピースが、その都度、筒内の鏡に乱反射することで無限の造形が誕生する。

同様に、社会福祉の理論・方法等も有限個でありながらツールとして個々の場面で活用すること、万華鏡で言えば、鏡に反射させることによって、無限のSW実践を達成する。社会福祉のピースを鏡へ反射させるために筒を回すこと、つまり、ソーシャルワーカーとクライアントの相互行為がなければ、無限の実践は達成されない。それが万華鏡とSW実践の造形の共通点である。

しかし、万華鏡とSW実践の造形には、根本的な相違がある。万華鏡の造形は、筒を物理的に回すことで起こるピースの乱反射による偶然の産物であるのに対して、SW実践は、ソーシャルワーカーとクライアント双方が理解でき、受け入れられる「方法的」な産物とならねばならない。つまり、無限ではあるが「方法的」に実行されなければ、SW実践は達成されない。

では、「方法的」なSW実践とは何か。簡潔に言えば、それが、ソーシャルワーカーとクライアントにとって共通のものとして受け入れることができる実践であることを指している。例えば、初回面接で、本来、ソーシャルワーカーが「受容」の姿勢を示すべき場面で、クライアントを一切見ず面接票に目を落とし、クローズド・クエスチョンを繰り返したとすれば、クライアントはそれを「受容」として受け止めることはできない。また、「方法的」という点では、恐らく第三者がそれを見ても「受容」として見届けることはないはずだ。つまり「方法的」なSW実践とは、ソーシャルワーカーによる一方的な姿勢によるものではなく、クライアント、さらには、第三者にとっても共通に理解できる「方法的」な取り組みであることが求められる。これが物理的な偶然による万華鏡の造形と、ソーシャルワーカーとクライアントの相互作用によって意図的に構築される造形の相違である。

しかし、この「方法的」なSW実践を達成するためには、その場面において、少なくとも2つの条件が満たされていなければならない。一つは、そのSW実践が、ソーシャルワーカー、クライアント、かつ第三者にとっても「説明でき、報告でき、記述でき」る形として「可視化」できること、例えば、「自己決定の尊重」が、誰にとっても「自己決定の尊重」として見て言える実践として行われる必要がある。それを実践の「説明可能性 (accountability)」と呼ぶ。二つめは、SW実践に限らず、すべての実践は場面のコンテキストに応じて実行される必要がある。つまり、そのコンテキストに即した方法＝知識を選び遂行するからこそ、場面における実践の妥当性は担保される。それを実践の「文脈表示性 (indexicality)」と呼ぶ。

この2つの条件が満たされたSW実践によって、それぞれの機会に応じた適切な援助場面が構築されていく。この構築の仕組みについて、さらに、ある専門職養成のシステムを通して理解を深めたい。

Ⅲ. 「座持ち」の相互反映性

「座持ち」とは、芸舞妓に関連する言葉である。芸舞妓とは、花街と言われる祇園や先斗町などで、「お座敷遊び」という伝統文化の担い手である芸妓の修行者を指す。この「座持ち」と芸舞妓の関係について、西尾(2012)を参考に理解を進める。

通常、芸舞妓は、中学あるいは高校卒業後、置屋へ住み込み修業に入る。置屋と芸舞妓とは、芸能事務所とその所属タレントに近い関係にあり、住み込む芸舞妓の日々の食事や着物や美容など修行にかかるすべての費用を置屋が負担する。芸舞妓は、昼間は、芸妓の養成学校へ通い、花街の歴史など座学を修め、踊り、小唄、俳句、茶湯等の習得に励む。夜は、見習いとして先輩芸妓に付き、お座敷で顧客を接待する。そうやって、1～2年ないしは3～4年の修行を積み、年季明け後、芸妓として独り立ちを果たす。

そして、その芸舞妓が、芸妓と成るべく身につける能力を「座持ち」と呼ぶ。「座持ち」とは、顧客を「もてなす能力」を指す。芸妓として、お座敷という場において、顧客を満足させられる力、踊りや小唄の披露や会話の相手など、顧客を飽きさせず楽しませる能力を「座持ち」という言葉で表している。花街では、「座持ちが良い」「座持ちが悪い」など、芸妓の能力を図

る評価の指標としてこの言葉が使われている。

この「座持ち」を構成する要素が3つある。一つが、伝統文化産業らしい基礎技能で、いわゆる芸事と言われる日本舞踊や小唄や太鼓など、芸妓として顧客へ披露するパフォーマンスである。二つめが、芸妓らしい作法や立居振舞である。例えば、お座敷での挨拶や歩き方、お酌の仕方、顧客との会話で品の良い京言葉を駆使する能力などを指す。そして三つめが、即興性という能力で、これは、顧客の要望を瞬時に見抜き対応する臨機応変さを意味する。例えば、今日のお客が、技能より会話を望む様子があれば、話し相手に徹する。とにかく、顧客の要望や場に応じて敏感に対応できる能力が求められる。

この3つの要素について、実は、ソーシャルワーカーが求められる能力と相似している。例えば、一つめの基礎技能は、制度やサービス、援助方法や技術、さらには、理論やモデルの理解とそれらを実践する能力、つまり、専門知識・技術の行使にあたるだろうし、二つめの作法や立居振舞は、クライアントに対する態度あるいは会話の仕方や目線、笑顔や真剣さの表情などソーシャルワーカーとしてクライアントへ示す姿勢であろうし、三つめの即興性も、現実の相談援助には多様なケースがあり、かつ、クライアントの特徴もそれぞれである。もちろん、その相談過程においてもそれぞれの変遷が予想される。それらのケースとクライアントに対して、その都度、SW実践としての適切さを堅持するために柔軟に対応すること、つまり、即興性も、ソーシャルワーカーに求められる重要な能力のひとつと言えよう。つまり、ソーシャルワーカーにも、芸妓の「座持ち」に近い能力が必要とされる⁶。

さて、ここで、「座持ち」を、専門職として身につけるべき「セオリー」⁷として、改めて考えたい。「セオリー」とは、端的に言えば、専門職がそれに寄って立つ「あるべき姿・形」を意味する。芸舞妓は、芸妓としての「あるべき姿・形」を習得しなければならないが、実は、それはとてもわかり易い。たとえば、芸舞妓には、必ず、先輩芸妓が「お姉さん」としてサポートに付く。この関係は義姉妹として固い絆で結ばれ、「お姉さん」は、基礎技能や立居振舞など、芸舞妓が一人前となるための必要なアドバイスを与える。

また、それ以外にも置屋のお母さん、あるいはお茶屋の女将さん、さらには、鼈貝のお客さんが、芸舞妓へ指導を行なう場合がある。つまり、芸舞妓が各場面で芸事や作法などが、その「セオリー」に反する場合、

「お姉さん」、「お母さん」、「女将さん」、そして「お客様」から、芸妓として必要な能力、つまり「座持ち」の伝授をその都度受けるわけである⁸。このような「セオリー」があるからこそ、芸舞妓が、何を、どのように、学ぶべきなのか、それが明確であるからこそ、3方向、4方向からの指導を可能にしている。

そして、この「セオリー」がセオリーであるのは、それが教科書のごとく、芸妓の能力のモデル化やマニュアル化によりなされるからではなく、お座敷での能力、つまり、お座敷の場面々で、どのような芸事を披露すべきか、どのような立居振舞を取るべきか、どのような臨機応変が必要なのか、それが、3者、4者から、つまり、お姉さん、お母さん、女将さん、そしてお客様が、瞬時に、それを課題として見分けることができるほど、場面と「セオリー」の関係が確立されているからである。だからこそ、芸舞妓も、この場面ではどう振る舞えばよかったのか、この場面で自分のやり方の何が違っていったのか等、理解と振り返りが得られ、確実に「座持ち」の習得へ結びつくのである。

つまり、「座持ち」は、芸妓の能力の「可視化」である。お座敷の各場面でその都度、適切な「座持ち」としての「セオリー」が浮かび上がり、それを確実に遂行することで伝統文化としての「お座敷遊び」が達成される。「座持ち」は、当該場面のコンテクストに即して決定される芸妓という専門職のツールの“仕様書”とも言えよう。それは「場面がツールを求め、ツールが場面を構成する」という「相互反映性 (reflexivity)」において芸妓の専門職としての能力が成立していることを物語っている。そこでは、その場面から遊離した「形式的な知識」が意味を持つことはない。

そして、実践における「場面とツール」の相互反映性は、説明可能性、文脈表示性と共に、ソーシャルワーカーの能力とその実践の連関を問う重要な基軸と言えるだろう。特に、「理論と実践のかい離」に関する課題を相互反映性において改めて捉え直すことの意義は、極めて大きい。

IV. <エスノメソドロジー>とは何か

これまでの議論は、「人々」がどのような「方法・手続き」で日々の実践を秩序づけているかを率直な研究関心とする<エスノメソドロジー>に多くを負っている。「説明可能性 (accountability)」「文脈表示性

(indexicality)」「相互反映性 (reflexivity)」は、いずれもエスノメソドロジーにとって中心的な分析軸となる。

さて、エスノメソドロジーの創始者であるハロルド・ガーフィンケルは、初期のエスノメソドロジー研究の特徴を、「現実の対象」への“まなざし”、つまり「知覚された対象」の相違として明らかにした。それが「存在論」における<対応説>と<同一説>への区分である⁹。

まず<対応説>は、「現実の対象」と「知覚された対象」を区別する。例えば、ひとつの宝石が“そこにある”とする。通常、われわれは、この宝石を、自分の影響（知覚作用）の結果として“そこにある”とは考えない。つまり、それは自分とは関わりなく、“そこにある”とする主観によって受け止めている。しかし、これにより、われわれは、この宝石を「現実の対象」の不完全な「知覚された対象」として認識することが運命づけられる。なぜならば、完全な具体的な宝石である「現実の対象」とそれへの「知覚された対象」を区別する限り、その「知覚された対象」は常に「現実の対象」の不完全な認識に止まるからである。完全体である「現実の対象」へまなざしを向けた不完全な「知覚された対象」がもう一方に存在する。これが<対応説>から導かれる理解となる。

しかし、その結果、「現実の対象」に対する「知覚された対象」の優劣が生じ、そこには「世界の複数性問題」が引き起こされる。そして、これを「研究者や科学者が状態について常に客観的に知っていて、成員はそれを知らない」とする特権的な地位（客観主義的二分法）を彼ら（研究者や科学者）に与えること（岡田、1994a、p 12）によって、その回避が図られる。

それに対して、<同一説>は、「現実の対象」と「知覚された対象」を区別しない。われわれは、通常の生活の中で、“そこにある”宝石を手に取り、輝きを確かめ、値段の予想などをする。つまり、いつもの実践過程が、その宝石をわれわれにとって「知覚された対象」として浮かび上がらせる。それは、その宝石の「現実の対象」と「知覚された対象」の一致を目指す科学的な関心ではなく、普段通りの動機とやり取りによって、その場面にとって妥当な宝石が構築されていく。われわれにとって、その妥当な宝石こそが「知覚された対象」であり、かつ「現実の対象」でもある。つまり、「知覚された対象」こそが「現実の対象」であり、それ以外に「対象」の行方などない、これが<同一説>の主張である。

そして、エスノメソドロジーは、この<同一説>を

採用することによって、従来の〈対応説〉に基づくアプローチから決定的な「転回」を果たすことになる。「転回」¹⁰とは、現実を主観によるものから、言語によって構成されるものとした〈言語論的転回 (linguistic turn)〉を端緒として、《いま-ここ》における「人々の方法・手続き」=エスノメソドロジー¹¹によって構成されるものとする〈手続き論的転回 (procedural turn)〉へ至る流れを指している。

とりわけ、エスノメソドロジーにとって重要な点は、「人々の方法・手続き」によって構築された《いま-ここ》における世界への関心である。つまり、成員が、実践場面をどのような方法・手続きによって構築しているのか、そして、その実践に対して、外側の視点からの解釈や説明を排し、「人々の方法・手続き」それ自体を記述することへ率直なまなざしが向けられる。〈対応説〉にもあるように、従来の研究アプローチは、これまで《いま-ここ》の実践から切り離された「記号化された対象 (二次的な構成)」の記述を目指してきた。それに対して、エスノメソドロジーは、《いま-ここ》に止まり、成員の実践を「説明可能性」「文脈表示性」「相互反映性」に即して記述すること (一次的な構成) を選択したのである。

SW実践も通常の実践と何ら変わらず、「人々の方法・手続き」によって達成される。どのような場面であっても、それがソーシャルワーカー・クライアント双方にとって参加できるものであるのなら、そこに「方法的」な実践が成立していることを意味する。「方法的」であるからこそ、お互いにとって、そこで「何をしているか見てわかるように何かをする、その仕方」(浜, 2004, p 7) として、その実践を理解することができる。それが実践の「説明でき、報告でき、記述でき」ることを指す「説明可能性」という性質を示している。

しかし、「方法的」でありさえすれば、どんな場合でも実践の「説明可能性」を実現できるわけではない。たとえば、ソーシャルワーカーにとって「自己決定の尊重」が方法として正しくとも、生活施設において重度の糖尿病を患う利用者の過度なカロリー摂取の要求へ、原則通りに対応することが混乱を招く場合がある。つまり、その場面の秩序を達成するには、その用いられた方法それ自体の正しさとその方法がその場面のコンテキストで用いられることの正しさが、同時に満たされていなければならない。それは、方法の使用される実践の文脈次第で意味を変化させる性質を示してお

り、それが実践の「文脈表示性」である。

このように、妥当な実践を成立させるためには、《いま-ここ》の場面において、成員による「人々の方法・手続き」が「説明可能性」を実現し、「文脈表示性」をコントロールできなければならない。しかし、一方で、この複雑な現実構築へ積極的に加担しているはずの成員自身は、その仕組み自体へ容易に気づくことはない。なぜならば、通常、成員は〈対応説〉=「世俗的存在論」(岡田, 1994a, p 14) を素朴に受け入れており、それが現実構築の仕組みへの気づきを徹底的に阻んでいるからである。この立場にある限り、成員による知覚作用は、常に「現実の対象」の反射として捉えられ、それが成員自身の積極的な知覚の結果ではなく、恰もそれとは無関係に独立した事実として受け入れる姿勢を取らせることになる。

しかし、〈同一説〉の立場では、成員の知覚作用 (実践) なくして現実構築は成り立ちえない。成員の実践である「人々の方法・手続き」こそが、その場面を組織だった日常の出来事に変える。つまり、「人々の方法・手続き」が、その場面を構築するためのツールとなり、翻って、それがツールでありえるのは、その場面の求めるところに“おいて”成立する。この現実構築の互いが互いを支えあう関係を、すなわち「相互反映性」と言う。

さて、「説明可能性」「文脈表示性」「相互反映性」は、普段の日常生活の現実構築の特徴であり、且つその現実構築を記述するエスノメソドロジー研究の分析ツールでもある。SW実践もひとつの現実構築であり、それらの特徴を持って達成される機会であるとするならば、これらの視点に立ちSW実践を「人々の方法・手続き」として記述することは、これまでの社会福祉研究・教育・実践にとって想像以上に画期的なことのように思われる¹²。

V. 「気づき」の仕組み

福祉現場のフィールドワーク等の機会に頻回にデータに入る概念がある。それが「気づき」という言葉である。恐らく「気づき」は福祉現場にとって、理屈に合うからこそ頻繁に口にされる言葉のように思われる。この「気づき」の働きをエスノメソドロジーの視点から改めて整理することによって、《いま-ここ》における福祉現場の現実構築の仕組みを探りたい。

さて、図A¹³を説明しよう。これは、ある大学の社会福祉援助技術現場実習の機会に特別養護老人ホーム

で行われたスーパービジョンのトランスクリプトである。実習生と実習指導者によるその日の実習の振り返りの場面であり、「機械浴見学」のくだりである。

まず、ここで注目すべき点は、実習指導者の「どう思いましたか？機械のお風呂は」という発話である。一見、何気ない質問に思えるが、脈略において実習指導者の明確な意図が込められたものであることが理解できる。この質問は「機械浴見学」限定ではあるが、基本的にオープン・クエスチョンでなされている。これによって、実習生はその範囲であれば自由な応答が許される。おそらく、実習生は応答への限定がない分、この「機械浴見学」の経験を一通り思い描くのではないだろうか。実際に思い描いたかどうかではなく、思い描くべき条件をこのオープン・クエスチョンによって与えられている。つまり、この質問の意図は、「機械浴見学」の経験を広くたどらせ、その後の応答の素地をつくることに置かれていたと言えよう。

実習生

けっこう利用者さんが、あの・・・立つ時に、ビクビク怖がってたので、あの泡の、泡というより、音だと思うんですよ。それがちょっと可哀想かなっていう感じはしました、

泡出しますよっていうか、説明的ではないですけど一言はかけてましたね。でも、その慣れてないせいだと思うんですよ。介助されている人一般的に家に泡、泡のお風呂あるわけもないし、

そのときは、どうでしょう・・・うん、むずかしい。ちょっと説明できないですね。やっぱ、そう話すしか、後は、機械の音を抑えるとかしか思いつかなかったですね

そして、その経験の振り返りから実習生は「泡というより、音」を「怖がってた」ことを、応答として選択した。次に、実習指導者は「泡を出した時」に限定して、改めて「じゃあ、どういうふうにしたらいいと思いました？」と再び質問を返すが、実習生は納得できる応答が引き出せない。そこで、実習指導者は“助け舟”として、「泡は家でも使わない」あるいは「一言言うか言わないで」など、前段の実習生の発話内容を用いた質問をし直している。この言葉の選択によって「あなた自身の経験を振り返りなさい」という意図が込められた質問であることは容易に理解できる。そして、それに対して実習生が「出した後、どうなるかっていう状態を説明的に入れたほうがいい、と今思いました」と応答すると、即座に「今思いました？気づき（…）ですね」とそれへの評価を行っている。

この相互行為は、冒頭のオープン・クエスチョンと、それに続く、実習生自身の言葉を用いた“助け舟”か

実習指導者

どう思いましたか？機械のお風呂は、

泡を出した時、泡を出す時は、あの職員の方は、声がけして出していたんですか？

その時、じゃあ、どういうふうにしたらいいと思いました？

思いつかない。そう、ご自分で今は、本来、泡は家でも使わないって、言ったじゃないですか、それを、あの一言言うか言わないかで、押したっていうふうに言いましたよね。で、ビクビクしてた

というふうなこと言いましたよね。じゃあ、どのように自分でしたらいいかなあって、そこにヒントが隠されてあると思うんですけど、どのようにしたらいいと思います？

んーやはり、もっと安心させるといふか、会話をしながら、何気にか、押します、今から泡でますんで気持ちよくなりますよ、みたいな感じで、出した後にどうなるかっていう状態を説明的に入れたほうがいい、と今思いました。

今思いました？気づき(…)ですよね。

図A 実習生と実習指導者のスーパービジョンのやり取り

ら、実習生に対して自らの経験を徹底的に振り返らせようとする実習指導者の意図は明らかである。そして、その経験の振り返りから導いた応答に対し、「気づき」という評価を与えている。

何故、実習指導者は、ある意味では誘導とも思えるやり方で「気づき」という評価が与えられる認識へ実習生を導いたのだろうか。そもそも「気づき」とは、その人がある対象へまなざしを向けたことで成立する認識であるとするれば、その対象は、「経験」(物やイメージもひとつの経験である)を指すことになるだろう。つまり、「気づき」を得るためには、それを引き出すための「経験」を、常に、前提としなければならない。そして、この「経験」と「気づき」の関係こそが、福祉現場が求める「理に適った」理解を導くための知恵と工夫が含まれている。

それを福祉現場の実践の特徴から探ってみよう。まず《いま-ここ》における現場では、実践を進めるにあたり、事前にその正解を用意することはできない。なぜならば、《いま-ここ》が求める実践は、常に、コンティジェント(偶然の出来事)な状況に置かれ、援助者は、クライアントや場面の展開次第で揺れ動く課題へ晒されることになるからである。

逆に言えば、その課題が求める実践の正解は、その場面の内側にこそあって外側から持ち込むことができない。つまり、上記のやり取りのように、当事者は、遭遇した課題と向き合い、その都度どうにかこうにか正解を引き出さねばならない。まさに眼前の課題と実践的な格闘の末に、正解を導き出していく。そこで得られた正解は、単なる知識でもなく単なる現象でもなく、その両者のアマルガムに置かれるものとなる。福祉現場では、

そんな認識の形態を「気づき」と呼ぶのではないだろうか。つまり、場面がツールに妥当性を与え、そのツールが場面の構成の一部を担う。それが実践の「相互反映性」であり、「気づき」は、その特徴を実践的根拠に基づき現場レベルの呼称へ言い改めたものと言えよう。

つまり、上記の実習生と実習指導者の相互行為は、実習生自身の経験の内側からあえて正解を引き出させることによって、現場ならではの「気づき」の仕組みを伝授するやり取りと言えるのではないだろうか。福祉現場にとって、「気づき」は、《いま-ここ》における実践を妥当な相互行為とするための内側から示された「セオリー」なのである。

Ⅶ. 「オントロジカル・ゲリマンダリング」

さて、「気づき」は、現場あるいは実践の特徴として半ば必然的に引き出される認識であるとするれば、そのことに対して、社会福祉研究・教育は、どのようなスタンスを取るべきなのだろうか。このことを「オントロジカル・ゲリマンダリング(ontological gerrymandering) = 「存在論上の恣意的線引」(以下、OG)」という問題提起を通して、その方向性を定めてみよう。

そもそもOGとは、エスノメソドロジーに近い立場から行われた社会構成主義=ナラティブ¹⁴に対する批判を指している。つまり、後者の考え方が、「存在論」に対して自らの主張の都合に合わせて「恣意的」な線引きを行なっているという告発である。

基本的に社会構成主義=ナラティブは、これまでの客観主義を排して、相対主義の立場から、人びとの「定義」そのものを扱うという主張によって、いわゆる「転

回」を果たしたアプローチとして、福祉研究でも多くの期待が寄せられている。それは「気づき」の特徴を見極める点からも有効なアプローチと思われたが、このOG問題の告発により、根本的な再考が求められている。

さて、「存在論」について、今一度、整理してみよう。「現実の対象」への認識は、＜対応説¹⁵＞と＜同一説＞に分けられる。＜対応説＞は、「現実の対象」とそのまなざしの結果である「知覚された対象」の区別を前提としている。そして、これにより「知覚された対象」の多元化の課題が引き起こされるが、「現実の対象」へより近接した「知覚された対象」を引き出す能力を持つ研究者や科学者の存在によって、その終息が図られた。

それに対して＜同一説＞は、「現実の対象」と「知覚された対象」を区別しない立場を取る。「現実の対象」が「知覚された対象」となるためには、われわれ自身が、「現実の対象」へ積極的に加担することが求められる。その加担の過程を通して「知覚された対象」はその姿を浮かび上がらせ、「現実の対象」はそのことを持って達成される。つまり、「知覚された対象」は成員によって構築され、それ以外に対象は存在しない。「知覚された対象」こそが「現実の対象」でもある。

そして＜同一説＞のもう一つの特徴は、結果的に「知覚された対象」を手にした成員は、自身で構築した「知覚された対象」でありながら、そのことを忘却する。つまり、眼前の「知覚された対象」を自らの取り組みの成果としては受け止めていない。そのことは、過程として＜同一説＞的な作業によって構築された「知覚された対象」を、結果として＜対応説＞的な成果として理解していることを意味する。日常生活の実感もこれに準じている。つまり、＜同一説＞という仕組みは、自ら積極的に構築しているにもかかわらず、構築作業そのものをその本人から隠蔽する作用が常に付きまとうことになる。しかし、「知覚された対象」は、それを成員自身が意味として積極的に受け止めない限り、決して対象とはなりえない。その意味を創り付与するのは紛れもなく成員自身である。

この「存在論」を踏まえて、改めて、社会構成主義＝ナラティヴへ突きつけられたOG問題を考えたい。社会構成主義＝ナラティヴの研究者や推進者は、一方で、自らは＜同一説＞に立ち展開を図ると宣言しながら、もう一方では、＜対応説＞の持ち込みが行なわれている。これがOGとして指摘を受ける部分である。

OGという汚名の矛先を簡潔に述べるとすれば、そ

れは、それぞれの分析に研究者側の思い込みや解釈が混入されている事実に対して、である。

具体的に整理してみよう。社会構成主義＝ナラティヴは、現実構築の手段として「物語」や「語り」あるいは「言葉」を積極的に取り上げる。それは「現実は、言葉によって構築される」（野口、2005、p 23）という宣言に端的に示されている。しかし、果たして現実を構成するのは、「語り」や「言葉」のみなのか。例えば、「目は口ほどに…」と言うように視線も極めて重要な現実構築の手段となりうる。あるいは、態度や表情、服装などが、《いま—ここ》の現実を構成する重要なツールとなる可能性を持っている。このことを前提とした時に、「語り」や「言葉」への限定は、研究者側からの恣意的な選択が行われていると見て取ることができる。

特に、ナラティヴ・アプローチの「ドミナント」と「オルタナティヴ」の扱いは、論理としてそれ自体を前提とした上で、アプローチの遂行が想定されている。もし＜同一説＞に立つならば、何を持って「ドミナント」か「オルタナティヴ」かは、アプローチの遂行前に決定されるのではなく、実際のカウンセリングやケースワークのやり取りによって構築されることが前提となり、それ自体が、そのやり取りによるのではなく、初めから想定するあり方、つまり、研究者が「ある」と言い切ること自体、それは自らの主張とは食い違う＜対応説＞に立つ姿勢と言えよう。これらのことから、OGを抱えた社会構成主義＝ナラティヴは、いわゆる「転回」に失敗したアプローチと結論づけざるを得ない。

以上、改めて確認すべきことは、相互反映性¹⁶という性質を持つ「気づき」の仕組みを捉えるには、徹底した＜同一説＞に基づき、外側からの解釈を排すことによるのみ達成されるものと言えよう。

VII. エスノメソドロジーによる「実践知」の提起

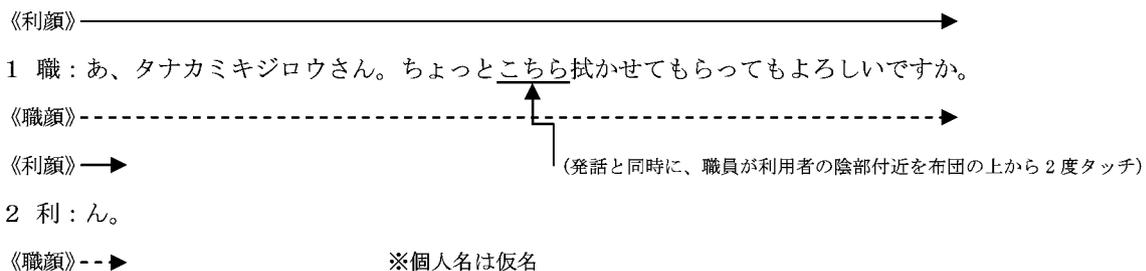
では、OGを抱えた社会構成主義＝ナラティヴは、SW実践にとって無意味なアプローチなのか。恐らくそうではないだろう。社会構成主義＝ナラティヴは、これまでの医学モデルや生活モデルなど、純粋に＜対応説＞に立つアプローチと比較しても、実践サイドから、社会福祉のアポリアである「理論と実践のかい離」へ新たな提起を内包したアプローチである。言い換えれば、“実践にとって役立つ知識”、つまり「実践知」¹⁷の提起への可能性を持っている。

しかし、そのためには、OG問題を乗り越える必要がある。そして、OGの克服が<同一説>の徹底に置かれるとすれば、持ち込まれる<対応説>の排除が不可欠であり、そのためには、<いま-ここ>における現実構築の根拠を「人々の方法・手続き」に限定することが求められる。

それは、すなわち、エスノメソドロロジーの導入へ直結する。エスノメソドロロジーは、<いま-ここ>における現実が、成員による相互行為、つまり「人々の方法・手続き」によって構築される仕組みを率直に記述するアプローチである。われわれは現実構築の手段として言葉や視線・表情や動作などを相互行為へ持ち込み、日常生活の各場面の達成を図っている。エスノメソドロロジーは、その現実構築のために用いられた「人々の方法・手続き」を、その場面の録音録画データ等の詳細な分析を通して、それらが妥当な相互行為として達成される仕組みの記述を目指している。

ここでエスノメソドロロジーによる分析方法と分析結果を紹介しよう。図B¹⁸は、ある特別養護老人ホームの排泄介護場面の相互行為分析によるトランスクリプトである。時間にすれば、30秒足らずの相互行為において「自己決定の尊重」と「プライバシーの配慮」が達成される様子を確認することができる。

まず、介護職員はベッドサイドに立ち「こちら拭かせてもらってもよろしいですか」と発話している。その時、発話と同時進行で、介護職員の視線(→)が利用者の顔(<利顔>)を捉えている様子を確認できる。それに対して、利用者の視線(→)も介護職員の顔(<職顔>)を捉え、互いの視線が交差する状態において、利用者は「ん」と発話を行なっている。つまり、お互いに視線を交差させながら、排泄介護の依頼を行ない、それに対する承諾を与えている。この場面において「自己決定の尊重」の達成が具体的な相互行為によって担保されていることが理解できる。



図B 特別養護老人ホームの排泄介護場面のトランスクリプト

また、介護職員の「こちら」という指示代名詞による発話は、それと同時に取られたタッチによる補完を含め、相部屋による排泄介護の情報漏えいを防ぐ意図によるものであること、つまり、「プライバシーの配慮」の達成であることもその相互行為において妥当と言えよう。上記のように、エスノメソドロロジーは、外側から解釈を持ち込まず、<いま-ここ>における現実構築の仕組みを相互行為における妥当性に基づき記述することを目的としている。

さて、改めて社会構成主義=ナラティブ、そしてエスノメソドロロジーを踏まえて、社会福祉の理論・方法等がどうあるべきかを問いたい。そのためには、前提として、それらが実践場面の課題や条件および、援助者とクライアントの相互行為にとってツールとして用いられる、その現実構築のもとで問われることを確認しなければならない。それが「実践知」としてのベク

トルへ結びつくことにもなる。

まず、OGを乗り越えられない社会構成主義=ナラティブから引き出された知識に、この「実践知」の可能性を託すことはできない。しかし、援助者にとって、<いま-ここ>における実践を展開する上で、すべての情報は、ツールとなりうる可能性を秘めている。そういう意味では、医学モデルであっても生活モデルであってもOGを抱えた社会構成主義=ナラティブであっても同様の立場にある。

しかし、種をあかせば、<いま-ここ>で行なわれる実践にとって、たとえ<同一説>に立った知識が提供されたとしても、それが<いま-ここ>で行われる実践をコントロールする直接的な力を持つわけではない。なぜならば、基本的に実践は、それぞれ独自の過程を経てそれぞれ固有の仕組みとして構築されていく。その性質に対して、それとは全く違う次元で組み上げ

られた知識が、基本的には《いま－ここ》における実践の間尺に合うはずがないからである。

そもそも「実践知」は、知識だけが単体として成立する概念ではない。「実践知」は、それが用いられる場面の多様な要素、成員や道具や場所の条件などと理論・方法等の融合の結果として姿を現す。つまり、「実践知」は、それらが用いられる《いま－ここ》における実践と遊離して成立するものではない。

今一度、確認すべきことは、いかに洗練された理論・方法等であったとしても、援助者が取り組む「実践」あるいは「実践知」にとって、それらは、外側に位置し、どんな場合においても、“ツール”としての域を越え出るものではないのだ。

《いま－ここ》の実践へ向き合う援助者は、常に、眼前の活動へ対峙し、それとの心身の格闘の末に、妥当な援助を紡ぎ出さなければならない。それに対して、その実践の外側にある知識が担える役割は、“ツール”という可能性の立場以外にないと考えべきであろう。そうであるとすれば、当該実践の外側から科学的アプローチが提示できる《いま－ここ》での実践にとって最も役立つ知識とはどのようなものだろうか。

それは、その実践から一番近い距離感で提示できる知識を指すことになる。つまり、「事例」による提示である。ただ、これまでの〈対応説〉による解釈、つまり、その事例の外側から持ち込まれた枠組みによる解釈としてではなく、その実践で展開されている知識と状況の結び、重なり合う様相が示された内側からの「事例」、つまり、エスノメソドロジーによる記述に基づく「事例」に求められると、ここでは結論づけたい¹⁹。

つまり、その場面の状況や課題とツールとなる理論・方法等が、その展開において結び、重なり合う実践を構築するために求められる「事例」とは、それが、当該実践と相違した次元の成果であったとしても、内側からの記述に基づく「実践知」という形態において、当該実践にとって極めて近接した“ツール”の提供となるだろう。そのことにおいて、エスノメソドロジーによる知見は極めて有効である。また、それが実践に対する科学の正しい立ち位置でもある。

注

- 1 本論文は、藤田徹研究代表（2012）に加筆修正したものである。
- 2 養成校での資格取得のために習得すべきカリキュ

ラムの範囲を示している。それが網羅されたものを「教科書」とし、その内容の代表を「理論・方法等」とした。

- 3 本論文の題目にある「社会福祉研究・教育・実践」の具体的な内容を「ソーシャルワーカー」あるいは「ソーシャルワーク実践」に代表させるが、基本的に福祉現場の対人援助であれば、そのすべてが範疇に含まれることを断っておく。
- 4 ここでの「問い直」しは、あくまでも社会福祉教育（養成教育を含む）を軸とした検討を指す。例えば、それに対する研究領域の課題を関連づけるとすれば、いわゆる「教科書」へ提供されている成果が一般論に止まり、実践状況から遊離した知識となっていること等の提起の範囲に限られる。
- 5 ここでの「理論・方法等」とは、《いま－ここ》におけるSW実践を達成するために用いられるツール（例えば、法律、サービス、援助技術等）となりうる次元の知識を指している。
- 6 「座持ち」に近い能力は、基本的にソーシャルワーカー以外にも、専門職としての特有な課題を持ち、それに対する専門的な知識、そして状況に応じた柔軟な対応が求められる対人援助職、例えば、看護師や臨床心理士等にも共通に当てはまる内容と言えよう。
- 7 ここでの「セオリー」とは、場面を超えた一般的な規則を指すのではなく、その場面の固有な展開に応じてその都度、行使することが妥当とされる実践の仕組みを指している。しかし、通常、われわれが日常活動で用いる「セオリー」に対して、それがどのように取り込まれるべきなのか、一々意識することはないが、専門職の場合、その課題の性質からそれらをより明確に取り扱うことが求められる。
- 8 恐らくこれらのことが、花街の「セオリー」を守り、芸妓の「あるべき姿・形」をしっかりと受け継ぐ仕組みともなっている。
- 9 浜（1992）を参照。
- 10 エスノメソドロジーに関連する「転回」については、岡田（1994b）参照。
- 11 エスノメソドロジーの研究意図は、社会の秩序は、研究者が専門的な解釈を通して初めて発見する課題ではなく、それ以前に、その秩序の担い手である普通の「人々の方法＝エスノメソドロジー」によって構築されているものであり、それ自体を率直に学ぶことに置かれている。つまり、エスノメソドロジー

- という名称が、研究対象であると同時に、それに対する研究方法として付与される理由がそこにある。
- 12 モンティグニーは、エスノメソドロロジー分析がソーシャルワークにもたらす効果を「ソーシャルワーカーが、現実の人々がいかに秩序を形成し、個々の場面で巧妙に相互行為を成し遂げていくのか、その姿を掘り起し、公表していくことが可能となる」点を挙げている。(Gerald de Montigny, 2007, p96)
- 13 本場面は、2004年6～9月にかけて調査されたある特別養護老人ホームで行われた社会福祉援助技術現場実習の実習生と実習指導者によるスーパービジョンに関する録音録画データのトランスクリプトである。尚、撮影及びビデオテープの使用については、調査者と被調査者（当該の実習生・施設長・実習指導者）との合意の基で進められた。
- 14 ナラティブ・アプローチは「社会構成主義をその理論的基礎としている」（野口、2005、p 22）ことにより、その批判の対象へ含まれる。
- 15 福祉研究において、＜対応説＞から＜同一説＞への批判として確認されるものとして、「社会構成主義＝ナラティブ」に対するものがある。例えば、秋山薊二（2004）は、ナラティブ・アプローチを「言語の単純化の問題」「境界の問題」「オルタナティブ・ストーリーによる意味の変容への問題」等を挙げてその課題に触れている。しかし、その批判の誘因は、ナラティブ・アプローチの状況超越的な側面、つまり、ナラティブ・アプローチの抱える＜対応説＞の残滓に求められ、その批判の関係は、実態として＜対応説＞からの＜対応説＞へのものとなっている。その詳細は、本文の「VI.」を参照。そういう意味では、純粹なく同一説＞に立つ研究、つまり、エスノメソドロロジーに対する＜対応説＞に基づく福祉研究からの批判は、筆者の知る限り皆無である。
- 16 ここに「説明可能性」と「文脈表示性」も含まれることを確認しなければならない。
- 17 「実践知」とは、＜いまここ＞という実践で求められる知識を指し、その実践の固有の条件、例えば、場面やその目的、そこに構成されたアーティファクト等と妥当な形で結びつく固有の知識を指している。
- 18 本データは、2000年度青森県立保健大学特別研究助成を受けた「地域特性と福祉サービスのあり方をめぐる総合的研究－むつ市・八戸市・その他の事例－」に基づき実施された調査データによるものである。

- 19 これらのことを浜（2004）に基づき、ガーフィンケルが提示した「翻訳定理」＝ { } → () で説明し直すと、＜同一説＞は、具体的な現象を示す { } に留まり、内部的な仕組みとしての記述に徹するが、＜対応説＞は、外部的な枠組みである→を { } へ解釈として施し、() という、例えば、“理論”や“ケース”へと翻訳する。つまり、このことによる事例の性質としての相違が生じる。

引用文献

- 浜日出夫 1992 第1章 現象学的社会学からエスノメソドロロジーへ 好井裕明編 エスノメソドロロジーの現実 せめぎあう＜生＞と＜常＞ 世界思想社、p 2-22
- 浜日出夫 2004 第1章 エスノメソドロロジーの発見 山崎敬一編 実践エスノメソドロロジー入門 有斐閣、p 2 - 14
- 野口裕二 2005 ナラティブの臨床社会学 勁草書房
- 岡田光弘 1994a 社会構成主義の現在－社会問題のエスノメソドロジ的理解を目指して－ 筑波社会学会、年報筑波社会学 5号, p 1-46
- Gerald de Montigny. 2007 Ethnomethodology for Social Work Qualitative Social Work : vol. 6 no. p 95-120

参考文献

- 秋山薊二 2004 社会構成主義とナラティブ・アプローチ－ソーシャルワークの視点から－ 関東学院大学人文科学研究所報 第27号, p 1 - 9
- 岡田光弘 1994b エスノメソドロロジーと認知的構論 お茶の水社会学研究会, Sociology Today 第5号, p 84-96、西尾久美子 2012 Eepert6-2 芸舞妓 金井壽宏・楠見孝編 実践知－エキスパートの知性 有斐閣 240 - 266
- 藤田徹研究代表 2012 3. エスノメソドロロジーによる社会福祉研究・教育・実践の新たな「転回」 藤田徹著、平成24年度岩手県立大学社会福祉学部研究プロジェクト研究 質的分析方法による「社会福祉研究」および「実習指導」に関する研究成果報告書 P13 - 21